

第26期 国立市社会教育委員の会（第3回定例会）会議要旨

令和7年7月23日（水）

〔参加者〕 内田、寺澤、堀、荒井、横山、根岸、田代、大森、松塚、生島

〔事務局〕 井田、楠本、関

生島議長 それでは時間になりましたので始めさせていただきたいと思います。第26期国立市社会教育委員の会第3回定例会を開会いたします。

本日は皆様に御出席いただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

では、まず初めに本日の配付資料につきまして、事務局から御説明をお願いいたします。

事務局 事務局から配付資料の説明をさせていただきます。皆様から見て左側に置かれておりますのが資料1といたしまして、ライフステージに応じた学習機会の充実のための方策について、各委員の意見。資料2としまして、都市社連協関連資料となっております。そして右側に置かれておりますのが、第26期第2回の議事録、そして公民館だより、図書室月報、いんふおめーしょんとなっております。何か資料等が足りない方はいらっしゃいますでしょうか。大丈夫でしょうか。

それでは資料の説明は以上となります。

生島議長 ありがとうございます。それでは次第2の今後の進め方について入りたいと思います。本日は、前回の定例会でお願いをしておりました事前シートにつきまして、皆様方からたくさん書き込んでいただいておりますので、これをまず存分にしゃべっていただこうというのが、まずは今回の趣旨です。最初に御了解をいただければと思いましたが、この後、少しまとめていくとなったときに、恐らく少し力技であったり、私の意見なども含めて考えていくこともあろうかと思いましたが、最初には、ここでお出しせずに、まずは皆様方から忌憚なくイメージしていくものをお出しいただいきたいと思っております。今日はそういう会に充てていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

早速ですけれども、資料1を基にしながら、どういう趣旨でこういうことで書いてこられたかについてお伺いできればと思っております。そして皆様方から1周ぐるっとという形にしていき、その後で、ほかの方の御意見を伺いながら、さらにこう思ったということもありましたら、追加で少し議論をしていきたいと思っております。今日の進め方はそんなようなところで考えておりますので、よろしくお願いいたします。そうしましたら、これからお話しいただきますけれども、何か質問などもある場合には、していただけるようにしたいと思いますので、その旨も御承知ください。

ではすみません、近いところで、順番でということで、内田委員からお願いできればと思っております。よろしくお願いいたします。

内田委員 ライフステージに応じた学習機会の充実のための方策ということで、ここに書いておいたのは、国立市でできるところを焦点化して、この後、取り組んでいったらいいんじゃないかなという思いでここに書きました。働きながら学べる環境整備ですとか、リカレント教育などについては、国立市で請け負うにはちょっと荷が重いんじゃないかなというところが、本当にそうなのかは分からないんですけど、自分の捉えとしてはそういう気がしています。一方で、現

代的、社会的な課題に対応した学習とか、高齢者の生涯学習の推進などは、国立市でも十分取り組める内容じゃないかなと思っています。そうした場合、本当に知的好奇心が充足できたり、理解が進んだりとか、あるいは参加すること自体が楽しみになったり、あるいはそれが次の機会に結びついたりというような、そんな取組ができるんじゃないかなと考えました。その辺りは、本当にもっと具体的な内容に煮詰めていく必要があるかなと思っています。

それから調査のことにつきましては、前回出していただいた調査は、本当に国立市の大きな大きな調査の中の1つだったので、やはり生涯学習に特化した意識調査等ができればいいんじゃないかなと考えるんですけど、じゃあ、一般的に市民に投げかけて答えてくれるかどうかは、ちょっとその辺り疑問でも。取れば、本当はそれもぜひやっていただきたいところですが、もう一つの方法としては、本当に今、生涯学習の窓口である図書館とか公民館等を利用している方、あるいは子育て施設を利用している方に直接アンケート、聞き取り調査などをすることで、具体的なニーズが探れるのではないかなと思ってここに書きました。

最後、確認したい点ということで、前回答申のICT活用による学習機会の可能性の内容、この辺りをどの程度、今後の議論の考慮する事項として入れ込んでいくのかをちょっと確認しつつ進めればいいかなと思ってここに書きました。

以上となります。

生島議長　ありがとうございます。3点目のところにつきまして、先にちょっとこのことは共有しておいてもいいのかなと思いましたけれども、事務局からこれはお願いできましたでしょうか。前回の答申をどのように活用していくかについてなんですけれども、ちょっと私のほうで先に触れさせていただきますと、私の感覚では、答申をつくっていくためには諮問がされているわけで、その諮問を受けての答申なので、ここに必ず連動させていかないといけないということではないかと思います。今回は新たな諮問をまたされているわけですので、今回の諮問に対して答えていくということですのでよろしいかと思います。ただし、例えば内容的に何か重なってくるものがあったりだとか、また、前回の議論を踏まえて、こういうふうと考えていけるんじゃないかというような連動性を持たせるということが内容によってあるのであれば、そこは十分、これまでの蓄積ということですので、議論に関わらせてもいいのかなとは思っているところです。

前期の委員でいらした方、もし御意見ありましたら、お話しいただければと思いますけれども、いかがでしょう。寺澤委員、何かありますか。

寺澤委員　必要があるところがあれば使っていければいいなと思うんですけど、必ずしもとは思っていない。

生島議長　根岸委員は。

根岸委員　無理やりつなげる必要はないと思いますが、後で私もお話ししますけれど、こういう切り口で見ると、ICTの活用は何かこういうこともあるんじゃないのかなというようなことはあるのかなと思いました。

生島議長　大森委員はいかがでしょう。

大森委員　前回、ICT活用と学習機会という2つ焦点があって、これをどうすれば

よいのか議論したのですけども、学習機会については特に、ふだん触るのではなくて、ICT活用に特化した答申だったんですね。そういう意味で言うと、今回はいよいよ学習機会の充実の何かということに踏み込んでいく答申なので、よいのではないかなと思います。

生島議長 ありがとうございます。いかがでしょうか、内田委員。

内田委員 委員の皆さんの意見はよく分かりました。

生島議長 ありがとうございます。また何か加えてありましたら、御発言いただければと思います。

では続きまして、寺澤委員、お願いいたします。

寺澤委員 すみません、ちょっと私、視点がずれているのかもしれないんですけど、何が生涯学習なのかなということが、個人的に分からなくなってきていて、習い事みたいな、どこかに行って何かをしなければいけないとか、誰か先生の話聞かなければいけないとか、そういう学びだけが生涯学習なのかなと。ライフステージによって、忙しくなったらできないみたいなことを考えるのは、多分そういうことだから、子育て中は習い事もやめざるを得ないとかで生涯学習が切れちゃうという感覚、分からなくもないんですけど。

子育ての期間は子育ての期間で、学ぶことはすごくいっぱいありましたし、自分自身を振り返ってきても、全く学ばなかった時期ってあったのかななんてちょっと思ったりして、でも一方で、そういう習い事とかをやめちゃったから、自分は何もやっていないという方もいたのも事実で、そうすると、自分は何もやっていないとか、何もできていないみたいな、ちょっと後ろ向きな感じになっちゃう。

だから、そうならないためにも、日々の生活の中で、私たちはいろんなことを学んでいて、その一つ一つが自分の身になっていくんだという意識が広がってくると、切れ目があるとか、ないとか、そういうことはなくなってくるのかなと思ったので、そのことを書かせてもらいました。

そういう目を見たときに、じゃあどういうふうに調査をしたらいいのかと考ええると、結局そこに行っている人にだけの調査になっちゃうと、それは十分ではなくて、行っている人も、行っていない人も、家の中でできるような、何か工夫ができるような調査方法は何だろうと思いました。全戸配布されている広報誌とか、目立つところに、こういう目的で、できるだけ全員に答えてほしい、時間は5分くらい、簡単な調査ですというのでできると、偏りなく（それでも若干は偏っちゃうと思うんですけど）、調査もできて、見えてくるのかなと思ったので、こういうふうに書かせていただきました。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。具体的なアンケートをできるだけ多くの市民に。特定の場で行われているものというだけにかかわらず、日常生活の中での学びを捉えていくという視点が大事なんじゃないかということでした。ありがとうございます。後で皆さん方、それぞれ、もし御質問などありましたらお伺いしていきたいと思います。

次に堀委員、お願いいたします。

堀委員 諮問は興味深い課題ですが、どう取り組んだらいいかどう書いたらいいかは非常に悩みます。

自分は図書館協議会委員ですが、その委員として図書館運営に意見を言うとか、あるいは公民館運営審議会委員の方が公民館に意見を言うとかのように、何かの施設についてなら、その施設が今やれている事業範囲はこうで、それを一歩広げるにはどうしたらいいかというふうに、具体的な限界も課題も見えて発言ができます。生涯学習の課題とか、学校教育の世代に限らない広い世代の中でとなると、そもそもどの範囲のことをどうコメントするかという問題があります。また、何かの事業や活動に参加する方にアンケートをとったら、それに興味を持つ方だけの調査になってしまう。

寺澤さんが1で書かれたことは非常に共感しました。学校教育でなく人生のステージの中での学習と考えると、何かの知識を獲得するとか何かの資格を得るとかではないような範囲のことが大事ではないか。人々は、時々それぞれ課題を見つけながら、たくましく生きようとしていると肯定的に捉えるほうがいいのではないか。そもそも生涯学習の範囲をどういうものと捉えるかという問題があります。

アンケートを取るとか調査してから始めるというようなことなのか、大いに疑問なところがあります。まず議論し、どういうことが課題か、共有できる学習観はどういうものかを掘り下げるほうが大事ではないか。

「ライフステージに応じた学習機会の充実のための方策」。方策とは政策の提言だと思います。先回りして予想を言えば、提言するとすれば、世代や境遇や生き方の多様性を踏まえた上での、自主的な学習への啓発と例示ではないか。事前シートの各課題は非常に書きにくい感じがしました。

現時点の考えでは、楽しさや必要性の啓発とか、多様な生き方や実践の例示とかがやれることではないかと、箇条書きで書きました。

2は、そのためにはどんな調査をしたらいいかですが、そもそも調査がなじむのかどうかを書きました。6、7、調査をするなら、調査の有効性の評価や分析が、調査前にも調査の実施後でも大事だと思う。行った事業に集う人だけの調査をしても仕方がないし、悉皆的な調査はすごく難しい。7に書いたが、調査は議論を広げ認識を深めるための道具かもしれない、くらいの認識ではないかという感じがです。

その他で、議論を進める上で確認したい点を、ということですから、調査することを前提にするのはいかがかと。「ライフステージに応じた学習機会の充実のための方策について」という問いへの、各委員の見識の披歴や対話。それと教育委員会事務局の現状把握との重ね合わせで、どこまで深め考えられるか議論することが大事というか、初めの初めではないか？ということ。それから、生涯学習をどのような範囲のものとして捉えるか。3は、最初から最後までつきまとう感じがします。

前に進める提案にならないかもしれませんが、書きました。

生島議長 ありがとうございます。調査ということについての位置づけとか捉え方ということについても言及をいただきまして、この後の議論であるとか、見解を深めていくときに1つの大きなポイントにもなりそうだと思います。ありがとうございます。

続きまして荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 いろいろ書いたんですけども、私の一番興味のあることは高齢者の生涯学習なので、それが中心にはなるんですけども、初めに1のところで、どのような場や機会が必要かということについては、学習成果を発表する場という

のが必要。あることはあるんですけども、それを拡充するということが大事な
なと思いまして、『国立市生涯学習振興・推進計画』においても、22ページに
ありますように、学習成果を発表する機会が少ないということはもう既に指摘
されていることでもあります。

自分で考えるのは、例えば図書館で調べ学習とか研究とかして、その支援と
成果発表の場をつくる。それから体育館とか公民館では、ダンスのサークルと
かあると思うんですけども、もともと市内の練習の場が少ないというのは公民
館だよりのサークル訪問を編集研究委員でやっていたときに聞き取っていた
ことです。市を超えて、ダンスの方とかは練習の場を確保しているようです。
特に国立市は少ないというのを聞いています。

あと、「切れ目のない学び」ということの考え方なんですけども、先ほど寺澤
委員もおっしゃいましたけど、本当に切れ目というものがあるのかどうかとい
うことも議論の1つだと思いますが、学習していないように見える時期があっ
てもいいのではないのかとも思います。女性がよく、就労についてはM字型と
言われるように、学習についてもそういう、一度は学習に参加していたけれど
も、それがまた定年退職後になるとか、そういうふうに現役のときは別の学び
をしていると考えて、地元への社会教育機会への参加というのはM字型とい
うか、回帰してくるとか、そういうM字型学習というパターンというのを考えて、
それに応じて、情報だけは送ることができるとか、そういう手立てを考えては
どうかと思いました。

2番目に、どのような調査をしたらいいかということですが、ここは高齢者
の市民に絞って、例えば高齢者の調べ学習というようなものがあって、やると
すれば、高齢者市民へのヒアリングをしてはどうかということです。国立調べ
というのが図書館では前にありまして、これはボランティアとして、レファレ
ンスのボランティアとして続いていたのですが、今、図書館ボランティアが集
まらなくなっていて中断中ということです。それから公民館ではシルバー学習室と
いうのがありますが、ここでやっているのは、やっぱり健康、福祉に関するも
のが多いなというので、各個人が調べるという感じではないように思います。
あとシニアカレッジというのは、これは地域包括センターがやっているものだ
と思うんですけども、ここもやっぱり個々人の興味というよりは、健康、福
祉に関する課題が多いと思います。そういう方たちが、どういうことを望んで
いるのかというのをヒアリングしてはどうかと思いました。

研究活動をするには資料が必要ですけども、地元の一橋大学とか、東京女子
体育大学、NHK学園とか、いろいろな学校があるわけですけども、例えば
市民が図書館のカードを作れるのか、そういうことなんかも調べてみてはどう
かと思いました。というのは、私が参考にした八王子市に、「千人塾」という図
書館がやっている事業がありまして、実は6月から今月にかけて、そこに聴講
生として行ってきたんですけども、八王子以外にも、町田市、座間市にも、そ
ういう取組がありまして、例えば八王子の市民の方々は、地元にたくさん大学
があって、その大学の図書館をどうやって使うか、使えるかというようなこと
もよく御存じでした。そういうことも調べてみてはどうかと思います。

それから3番目として、私は学習というのが、皆さんも生涯学習って何だろ
うとおっしゃいましたけど、学習というものの自体の見方が、本当に個々の人
によって違うのではないかと。公民館でインタビュー調査をしたことがあるん
ですけども、そのときにも、社会教育機関に全くコミットしていないような人も、
様々な学習をしているんだなということが分かりました。既にあるような学習
の形態ではなく、そこに何となく参加しているうちに身につけたとか、家業で
あるとか、そういうもので身につけている学び方というものもあるんだなと思
いました。誰でもできるというものではないと思うんですけども、昔で言う徒弟制

度みたいな、そういうものを、社会教育機関がマッチングするというと、別にハローワークではないので、ちょっと違うのかなとも思ったりもするんですけど、そういう学びへの観点も1つ持ってもいいのではないかなと思います。

それから、国立公民館の職員の辻口さんと、もう一つは、青山鉄兵さんという先生が、『図書館雑誌』の今年の6月号に、公民館としての独自の役割みたいなことを書いてらっしゃいます。社会教育機関というのは、公民館とかは集団での学習を目指すものですが、図書館というのは個人の学習に対する支援をしているところで、そこを兼ね備えたような働きを公民館図書室はしているのではないかなというようにことなんです。辻口さんは、くにたちブッククラブのことに触れていらっしゃいます。さっき私は、学習の成果を発表する場ということピックアップしましたがけれども、それと同じように、ブッククラブは、市民からの、読後感を話し合いたいというのから始まって、40年以上続いている講座なんです。2時間の講座のうち、大体半分は、参加者が感想を述べて、半分が講師の解説みたいなことになるんですが、今日配られています図書室月報の2ページを見ていただきたいんです。

そこに、今回参加した方が感想を書いていて、一番最後のところに、実はこの回のときは、2時間のうち、1時間半を参加者がしゃべっちゃったんです。何と講師の先生は30分くらいしかお話しにならなくて、このことが、予定の時間が足りなくて、山岸先生のお話が十分に聞けなかったのが残念だみたいなことが書いてあります。従来、国立市民はすごい語りたがる市民だと、講師の先生がよくおっしゃってたとおり、本当にこういうことが、とても人気のある講座なので、たくさん人が参加するということもあるんですけども、自分の思ったことを話したい、しゃべりたい、一言声に出すということをしたいという、そういうのが多分あるんだろうと思います。例えば個人が学習するときに図書館が支援する、だけれども、公民館的な集団学習のスタイルというものも、場面ごとに使い分けて、市民が主体となるような、そういう事業とか、発表の場をもっとつくっていったらどうかなというのが、今私の考えていることです。ちょっと取っ散らかってしまっただけなんですけど、以上です。

生島議長 ありがとうございます。個人の学習、それから集団的な学習、それを接続していくような在りようというものを御提起いただいたということで、様々な論点もありそうですし、視点も多くいただいたなと思っております。ありがとうございました。

では続きまして、横山委員、お願いいたします。

横山委員 私、スポーツ協会から来てますので、主にスポーツの関係のことでお話しさせていただきたいと思います。私たちの国立市スポーツ協会には、現在21団体のスポーツの方々が所属されています。その方々といろいろお会いすることがあるんですけども、その様子を見てみると、高齢化の方が多いかなと。でもその高齢化の方が楽しんでスポーツをして、そのスポーツに携わるボランティア活動もされています。これは生涯学習としてのスポーツが根付いていると私は思っています。

一方で、ライフステージにおける変化の大きい世代です。定年退職後、子育て終了後などの方が、きっかけがつかめないという、前回いただいたアンケートの結果で、ここがすごく私の中では気になってしまって、スポーツやりたいなと思っていても、なかなかやるきっかけがつかめないとか、そういうことをすごく感じてしまったのと、国立市自体のスポーツに対する体験の場が少ないのかなと思って、いろいろなスポーツが体験できるイベントがあったら、もっ

と皆さん、そういうきっかけをつかみやすいんじゃないのかなと思って書かせていただきました。

2 番の調査対象に関しては、様々な公共施設で行っているイベントとか、講習会などの催物に参加されている人数とか性別、年齢など、1 年分くらいを細かく実際に調べてみて、本当に、実際に国立の市民、国立じゃない人もいらっしゃるかもしれないんですけども、実際に、本当にどのような形で携わっているのかを調べてみると、そこから先にどうしていったらいいのかなというのがちょっと見えてくるのではないかなと思って書かせていただきました。

すみません、以上です。

生島議長 ありがとうございます。所属団体の実態のところから、具体的な1 年分くらい事業を分析してみたというのは、非常にこれも建設的であり、重要な視点、御指摘かなと思いました。ありがとうございます。

そうしましたら続きまして、根岸委員、お願いいたします。

根岸委員 まず設問 1 なんですけども、ライフステージにおける変化の大きい世代。それがずっとひっかかっちゃいまして、それって何と思って、この間のアンケートの結果、一応 20 代から 70 代まで、生涯学習を行っていない人のパーセント、それを括弧の中に書き出してみました。あと、その右側に書いてあるのは、各年代層に対する私の勝手なイメージです。私とか私の周りの人間、あと子供たちを見て、まあこんな感じかなと思って書き出してみました。

30 代はやはり忙しいんですね。子育て世代で。でも、先ほど寺澤委員がおっしゃっていたように、子育て中はほんと毎日が勉強なんですね。だから絶対、学びをやめているということではないと私もちょっと思っています。あと 40 代になると、これは会社に勤めている人なんてみんなそうだと思うんですけど、結構仕事が充実してきて、会社でもいろいろスキルアップ研修があったりとか、自分でやっぱりスキルを高めるためのいろんな資格試験を受けたりとか、やっぱり常に仕事に対する勉強はやっている世代かなと思います。あと 50 代になると、結構 31.4% の人が何もやっていないと書いてあったんですが、50 代って何なのかな。結構収入も多くなるとは思うんですけど、出費が大きいですよとか、あと 50 代になると、定年退職じゃないんですけど、その前に役職定年みたいなものがあって、今までずっと管理職だった人が、そこでまた担当者に戻るといって、すごく変わる、結構変わる場面だと私は思っているんですね。それとあと体力的にもかなり弱ってきている。それが 50 代なのかなと。60 代というのは、一応、割と生涯学習をやっているような感じなんですけど、ここがやっぱり定年退職で、時間は結構ある。第二の人生で、趣味とか仕事とか孫の世話とか、結構いろんなことをできる世代なのかなというような気もしています。

これらを見て、まず 30 代の人に対しては、とにかく忙しいので、リモートの活用による子育て支援のようなことが何かできればいいのかなと。これは先ほど言っていた、去年の、前期のテーマの ICT の活用ということになるんですが、ICT の活用ということを手段として考えていければいいのかなと思います。あと 40 代についても同じように、通信教育とか、リモートによるそういうサポートみたいなのがあればいいのかなと。あと、50 代の人というのは、恐らく次の世代への準備というステージになるのかなと思います。これについては 3 番目のところにちょっと補足しましたので、後でまたお話しします。

2 番目については、前回のアンケートの結果で、「健康、体力づくりをすること」、あと「生活を楽しみ、心を豊かにする活動をする」という設問に対しては、両方とも約 41% くらいの人が、何か取り組んでいるという回答だった

と思うんですが、その下の、例えばカルチャーセンターとか、スポーツセンターに通っているというところが少なかった。じゃあ一体何をやっているんだろうというのがすごく気になって、特に生活を楽しみ、心を豊かにする活動って何なのかなと思って、その辺ちょっと具体的に、何か話が聞ければいいなと思いました。

最後に、先ほど言った、50代は次の世代への準備というふうに書いたんですが、私は生涯スポーツ、少しやっているんですけども、結構、60代、70代の方が多くて、もう皆さん本当に元気で楽しくやっています。あと、地域活動、育成会とかフードバンクとか、そういう地域活動もやっているんですけども、そこもやっぱり高齢者の方が非常に活躍しています。しかしですね、特に生涯スポーツに関しては、先ほど横山委員の話では、60代、70代の方がやっていて根付いているという見方ももちろんあるんですが、60代になって始めている人というのはあんまりいないんですね。大体は40代、50代からやって、60代、70代でも元気にできている。地域活動についても、高齢者の方が活躍していますが、高齢者になって何か始めるというのは非常にきっかけをつかむのが難しいというふうに皆さん言ってます。このようなことを鑑みて、生涯スポーツとか、そういう地域活動というのは、早めに取り組むことが肝要かなと。それともなければ、本当に高齢者からできるような活動を創出していくということが重要なのかなと思いました。

あと、もう一つ子供とか若者について、学校以外の学習機会の充実というところでは、小中学生の学校教育と連動して、今、私たちがやっているような、そういう育成会の活動とか、あと国立市でも去年からコミュニティ・スクールが導入されましたので、この辺が1つのポイントになるのかなと思います。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。非常に多岐にわたって、しかし実態を捉えながら、そこから掘り起こしていただいたと思いました。

では、続きまして田代委員、お願いいたします。

田代委員 私も根岸委員と大体同じような流れで考えたのかなとは思っているんですけど、やっぱりライフステージごとに、役割とか悩みとか問題があったり、次の期への準備とか、将来を見据えた準備もやっていかなきゃいけないということで、例えば子供、青年、壮年、中年、老年と分けると、大体こんなことが起こるのかなみたいなのをそこに書きました。やっぱり場や機会ということになると、そういう年齢の人たちが何に悩んでいるとか、何を求めているかというのが分からないと、ちょっとどう対応していけばいいか分からないので、そういうことをまずちょっと、何かみんなで考えて、それに合わせた講座なりセミナーなり、何かいろいろな集まりみたいなをつくっていかなきゃいけないんじゃないかなということで考えました。

それから学習する内容としては、いろいろ講座とかセミナーの案内を見ると、まあ関係ないなみたいなが多いので、やっぱり集中的に必要なと思われるような内容を選んでやっていただければ参加する人が増えるんじゃないかなということも思いましたね。

それから次のページで、学習機会を充実したとしても、皆さん集まってくださいと言ったとしても、最初は集まるんですけど、結局、有象無象の集団になったりして、リーダーがいなくなかなか長続きしないんじゃないかなみたいに思いますね。私も男の料理というのをやっていて、そこにはリーダー格の人がいて、私は公民館と福社会館と中防災センターで月3回やっているんですけど、この人はそれに頼まれて、あと2回ぐらい国立市でやって、あと二、三回、

もと住んでいた世田谷区でやってるんで、月五、六回、料理教室をやっていて、そのたびに食材を購入して、出欠を取って、あと国立市の40箇所か50箇所ある掲示板に毎月チラシを貼って、それでお金の管理までしているということで、1人でやってヒイヒイしちゃって、誰かやってくれと言うんですけど、誰もやらないんですね。それでみんな1人でやってるということで、そういう人がいないとなかなか長続きしないかなみたいに思ってて、やっぱりそういう人を1人、どこかで探してきてやってもらいたいなのが重要なみたいに思ってます。

それから、今はやりの言葉というのがあって、内閣府が推奨しているんですけど、「全世代・全員活躍型のコミュニティ」というのがあるらしいです。ある同年代の人だけの集まりではどうもうまいかないということで、これは基本、地方創生の1つではあるらしいんですけど、多世代が一緒になって何かコミュニティを形成していくのが重要じゃないかみたいなのがあって、生涯学習とは言いながら、年寄りだけの集団とか、要はお母さんだけが集まってどうこうするとか、そういうことではなくて、みんなで一緒にやりましょうみたいな、そんなことも重要なみたいに思いました。

それから2番のアンケートですけど、これは不作為でいろんな人からアンケートもらっていますみたいなのが普通なんですけれども、それって何か、同じ大きい鍋のみそ汁は、どこを取っても同じ味がするとみんな言うんですけど、実はそうじゃなくて、アンケートの回収率によって、声の高い人はアンケートに答えるけど、声の小さい人はアンケートに答えないので、本当にそれがみんなの総意なのかというのはすごい疑問に思ってて、やっぱりその辺が、アンケートで回答しない人の回答をどうやって回収するかということではないかと思います。

例えば、ほとんどアンケートに答えてくれないお父さんであっても、イベント、市民祭りとかで見ていると、子供とお父さんみたいなのも結構いるんですね。そのときに、子供にガチャ引かせてやるからお父さん連れてこいみたいなことを言うと必ず来るんで、そういう人にアンケートを書いてもらえれば、お子さんがガチャ引けますよとか言って、要はちょっと手の込んだことを考えて、回答しない人に回答してもらいたいなのもいいんじゃないかなと思います。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。多くの年代の人で悩んでいることをどういうふうに捉えていくのかという点であるとか、今までなかったところですけども、世代を超えてというか、つないでいくという視点というのが大事なんじゃないかということとか、ポイントにもなってきたかなと思いつきながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

続きまして、松塚委員、お願いいたします。

松塚委員 まず1番目の、ライフステージにおける変化の大きい世代にとって、生涯学習の場や機会の拡充、切れ目のない学びを促進するためにはどういう機会が必要かということなんですけども、お話にもありましたように、生涯学習がどの範囲を指すのかということが必ずしも、私たちの中でさえも同意を得られているわけではないということは、市民全体を捉えますと、非常に多種多様な理解の在り方が考えられると思いますので、その辺りをまず整理をすることが大切なのではないかと思います。その上で、誰もが学べる機会や、その情報に接し、活用できるような「学び続ける社会」という環境整備が大切だと考えます。

具体的には、様々な「学びなおし」—ここで私、学びなおしという言葉を使いましたけれども、この学びなおしに関しても様々な定義があります。例えば、

国立市のホームページを見ますと、学びなおしという言葉、例えば高校などで学ぶ機会を逸してしまった方々が学びなおすというような意味合いで使われているときもあります。しかし最近では、学びなおしは、生涯教育だとかリカレント、リスキリングを包括的に含む概念として使われるようになってきている実態もあります。私のほうのここでの学びなおしは、包括的、例えば寺澤委員がおっしゃったような、日々の生活を快適に、平和に過ごすための知恵や、子供を育てる準備や知識の吸収なども含む包括的な概念としての学びなおしという意味で使っております。それも含めまして、どのような形態、種類、必要性（効果）、対象、方法があるのかということ、生涯学習をめぐる理解ということも含めて整理する手続がもしかしたら必要なのではないかと思います。

その上で、そのような情報を市民に分かりやすい形で広報し、周知していくということ。あと、荒井委員からありました「マッチング」というのが大変大切だと思います。そのような観点ともつながってくると思うんですけども、学習を希望する市民と、学習の場を提供する機関、組織、人をつなぐという、役割が非常に大切なのだと思います。

また、成果を公開する機会がないというような、お話が出ていました。そういった意味では、学びのプロセスと成果を共有、発表するというような場も含めた環境整備ということが大切じゃないかと思います。

2つ目の調査なんですけども、この調査に関しましては私、よくよく理解してこのように書いたわけではございません。といいますのは、これまでどのような調査を行ってきたのかということ、理解しているわけではありません。横山委員がおっしゃったように、調査をするだけが、いろいろなことを知るという手段というわけではなく、これまで様々なイベントに来た方たちが、どのようなイベントに、どのような目的で来たのか。それを整理するだけでもかなりの情報になるのではないかと思います。ですから、それも含めて、調査を実施することだけではなく、これまでの調査を整理することと、これまでのイベントがどのような要望を満たしてきているらしいのかというようなことの情報も整理することが大切なように、今日は改めて認識をさせていただく機会になったと思います。

調査で市民全体を対象にするということは非常に難しいということも承知しております。ただ、既にある機会に参加してくださった方というのは、やはり既に興味を持っているということが前提になるということとなりますと、市民全体のニーズや要望を反映した調査になるのかなというところが不安なところです。一方で、そのような機会に既にいらしている方に対して、より掘り下げていろいろ聞くということが、学びを深めていくためには有効ではないかと思います。

声なき声を聞くということでお話ししていただきましたけれども、これも大変大切なことです。例えば、生活に困窮していらっしゃる方、国立市でもいると思います。それは年齢層からみて、一見、仕事に直結したような情報を求めているような高齢者の方でも困っている方は実際にいらっしゃるのではないかと、多分いると断言していいと思うんですけども、そういった方々は恐らく調査をしても回答はしてこないだろうと思います。そういった観点から、本当に困っている方の声をどうやってくみ取っていくのか、なかなか自分の声を外に出さない方たちの声をどのようにくみ取っていくのかということも精査することが大切であると考えます。

あとは、これは賛否両論あるかもしれませんが、全国的に行われる調査と設問を一定程度統一することによって、国立市の特徴、独自の特徴を捉える必要があるのであれば、質問の内容に関して、一定程度の一貫性、他の地域との一貫性ということも考慮していく必要が出てくるのではないかと思います。

す。

その他のところですが、先ほどもお話ししましたように、これまでの調査や活動の実績があると思いますので、そちらを確認、整理して、議論をした上で上記の工程に進むというのがよいのではないかと思います。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。学び続ける社会の環境整備といったところで、4点挙げていただいているのが、見解、どういうふうに答申に向けて議論を展開していくかというような構造にも重ね合わせて考えられるのかなというふうなことも感じながら、ヒントをいただいていたというふうにも思っております。ありがとうございます。

では、最後に大森委員、お願いいたします。

大森委員 今、松塚委員から、困っている人のことを大切にするという趣旨のお話があったかと思います。それから田代委員のペーパーの中に、今困っていることを解決するための講座等は、その人にとっては必要なものと認識されるだろうという言葉もございました。その辺りに関わるお話をさせていただきます。

13ページなんですけれども、1番については、2つ目の黒ポチを読ませていただきます。私の話は、ライフステージに対応した学習機会というのは、かなり切実な内容も含んでいくことになるだろうということです。2つ目の黒ポチですが、今85歳は、1940年生。5歳のとき敗戦、20歳のとき高度成長。つらい経験と向き合う機会が得られなかった方たちも多い。こうした切実な課題と向き合っていく学習が求められているのではないか。私の手元に、今年の6月30日の朝日新聞のデジタル版があるんですけれども、ここには、さらに14歳年下、1954年生まれで71歳の方のことが書いてあるので、ちょっと10行だけ読ませていただきます。

「狂気に満ちた父の目。思い出すと、千葉県在住の新藤智子さん71歳は、今も動悸が激しくなる。酒に酔って斧を手にした父に追いかけられ、逃げ込んだ自室の引き戸におのを降り降ろされた。必死でドアを押さえて顔を上げると、戸にできた裂け目から爛々とした父の目が見えた。1回目の結婚生活が破綻し、家に戻ってきた30歳のころのことだ」。

これ、1984年のことですね。それからあと6年後なんですけれども、父は91歳で膵臓がんで亡くなった。やっと父の怒りのスイッチがいつ入るのか分からない不安から解放された。近所に住んでいた人と結婚します。39歳ですね。結婚して数か月のこと、おつれ合いが智子さんの異変に気づいた。夕食のとき天井を見上げ、うつろな目をして赤ちゃんのような口調でこう言い出した。ああ、きれいなお花畑。チョウチョが飛んでいる。子供返りをされているんですね。フラッシュバックを繰り返しておびえ続けた。結婚生活の30年のうち3分の2は寝ていたという。今も波があるが、2年前、これが2023年です。元日本兵の父や祖父を持つ人たちの体験が書かれた新聞記事を読み、あんな父にしてしまったのは戦争のトラウマなのではと気がついた。という文章なんです。

ここは今71歳の方なんですけども、やっとこれくらいまで解明が進んでいるんですが、例えば私、1965年生まれなんですけど、1965年は敗戦からまだ20年しかたっていないんですね。私自身、戦争で本当に傷ついた人たちに囲まれて実は育ってきてるんです。そのことで、いろんな歪みの中で生きてきて、それが私の生き方とか性格にも反映しているんですけど、私自身もなかなかそれを捉え返す機会がなかったりするんですね。そういう中で苦勞して生きている人たちにとっては、そういうのを捉え返すというのは本当に切実な

課題になるので、国立の社会教育は全国をリードするような位置にいますから、そういった課題に切り込んでいくような、きっかけをつかむような答申になると大変ありがたいなと思っております。

生島議長 ありがとうございます。これまでのお話とか話題とは、ちょっと違う切り口ではありましたが、今回の答申に関する期待ということを含めて新たな視点をいただいたかなと思っております。ありがとうございます。

今、一とおり一巡をしたわけですが、それぞれ皆さん方からの御意見とか見解を聞いて、こういうところはやっぱり確認したほうがいいんじゃないかであるとか、もう少しここを聞きたいというようなこととか、あとは皆さん方の中で、少しこのところを確認したいというようなところがありましたら、個別にでもいいですし、または全体にということも含めて、質問などありましたら出していただければと思います。いかがでしょうか。

私もさーっと聞いていたところで、完全に整理ができていないわけでは不是ですが、少しまとめてみると、1つはやっぱり生涯学習というのをどういうふうに捉えていくかということについて改めてこのメンバーの中で、まずはきちんと整理しておくことが必要なのではないかなというようにかなり共有されていたところではないかなと思います。

恐らく、前回御提示いただいた調査につきましても、その辺りが回答者にきちんと伝わる形で答えられていない。だからみんなイメージで答えているので、ですので、その数値をどうやって捉えていいかという、その疑問もあるんじゃないかなと思います。我々これから議論していくに当たっては、こうした生涯学習というのをどのように捉えていくのか、ただ具体的な事業であるとか、場に出ていくというだけじゃない、日常生活であるとか、または人との関わりの中のちょっとしたこと、そのライフステージのところにある気づきや学びという、そういうようなことも含めて考えていくということ。言ってしまうと、インフォーマル・エデュケーションというか、インフォーマル学習とノンフォーマル学習、その辺りをまとめてくくりにしているもので、その辺りはきちんと整理していくことが必要なのではないかな。

もう一つ、個人学習と集団的な学習の視点というのもあったと思います。こういったようなところを、まずは共有していく作業というのが必要になるんじゃないかということは、御意見として多く出ていたかなと思いました。

その上で、今回の諮問に対してどう議論をしていくか。ライフステージにおける学びとか、切れ目のない学びという……。はい。

堀委員 今の議長の整理は非常に大事だと思う。調査して始めようの前に、ちゃんと議論した方がいいのではないかが私の書いたことです。やはりその辺からということで、非常に大事ではないかなと思います。

その上で、委員の議論と同時に、教育委員会事務局の現状把握や発想との重ね合わせも必要ではないかという気がします。私達は諮問を与えられたわけですが、教育委員会はどのような発想なのか。どういう範囲を生涯学習なり、ライフステージの中の学習と捉えているのか。諮問を出した側はどう考えているか。ただ自由に我々の見解を出せという話でもないだろうと。

同様な難しい課題と思うのが、「ライフステージ」です。私もつい書き始めれば、根岸さんや田代さんが出されたような世代ごとのイメージを出してしまいます。しかし果たしてどこまで共通の典型なのかということ。この世代はこういうことをしているとか、この世代はこういう境遇にあるということが揺らいでいる感じがすごくします。昭和戦前期ならある世代はおおむねこういうことをしているとか、仕事の種類も決まっていたとか、男女別にあったでしょう。

しかし戦後も昭和時代ならともかく、平成、令和と来て今はものすごく生きる境遇が多様になっていて、世代ごとの典型は簡単に出しにくいのではないかな。田代さんや根岸さんが考えられたのは、自分はそうでしたが会社の正社員層のステージ。それに属さない層が多くなっている。誰もが自分で収入を得て暮らしているが、会社に属する人のステージと断ち切れた世代、多様な生き方が広がる中で、ライフステージは今ならどんな典型で考えられるのか。

令和を中心に、ここ10年くらいのライフステージ観はどうなのか。自分や皆さんは世代は近いが、下の世代の境遇は以前とは違う人も多い。自分の子どもの層や世代の違う知り合いを見たり、正社員でなく有期雇用、アルバイトで働いて生活している人々を考えると、世代別にどうと簡単には言えない。令和の中で、ライフステージという発想がとれるか。ライフステージの典型が出せるのか議論すべきことではないか。出さざるを得なければどう語るのかとか、限界があることを考えながら語ることだと思う。

ここも委員同士の議論や見解だけでなく、諮問を求めた教育委員会のライフステージ観はどうかと聞きたいところがある。諮問書の諮問理由は、3つの段落で書かれている。国立市の計画では。国の計画では。こうした状況を鑑みて。となる。つまり書かれているのは、令和の人々の暮らしの中では、という状況論ではなく、市や国の行政計画の中では、という書かれ方。だが行政の作文内ではなく、私達の身の回りにいる令和に生きる人達の中で、ライフステージはどう考えられるのかということだと思う。

そういう揺らいだ令和のライフステージ観は、この諮問書には出てこないようです。それは答える私たちが作らなければいけないことのようにですが、典型なことだけでやっていくと、長期雇用されてきた世代のライフステージ観でしか提案できない。この辺も難しい課題なのではないか。

ライフステージに応じた学習機会とは、昭和時代の諮問書と令和時代の諮問書では違うはず。やるなら、現在の状況の生涯学習はどうあるべき、ライフステージはどうあるべきということを、典型的な正規雇用に属する人でないような人たちもちゃんとすくい上げられるような議論にしなければ仕方がないのではないかなという感じがします。

生島議長 ありがとうございます。令和のライフステージ観というのが出ましたけれども、ライフステージであったり、根岸委員や田代委員が出してくださった年代に分けた発想というのももちろん大事だと思いますが、年代で分けられないんじゃないか、典型というのがないんじゃないか、世代という言い方もあろうかとも思いますけれども、どうしたらそういうのを捉えていくことができるのか、またはそれを典型例というんじゃない示し方もあり得るんじゃないのか。その辺りというのも、そこを擦り合わせをしていくことが必要だというふうな御意見だったと思います。

もう一つ、これは私も早い段階でなのか、どこかの段階で整理しないといけないなと思っていたところを御指摘いただいたと思っていますんですが、答申でどういうものを出していくのか。諮問した行政側、教育委員会側がどういう言葉のニュアンスで、またはどういうイメージでつくっていき、それにこちらが応えていくことができるのか。もちろん、市民、委員のレベルで、それを膨らませていくということとはとてもいいことだと思いますけれども、答申としてどういうところの形をつくっていくかの擦り合わせというのを、あらかじめ少し考えていくことも必要かと思います。その意味で、例えば今の生涯学習ということですか、ライフステージということについても、こういうふうを考えていくけれども、答申ではこう絞っていくというような、そういう発想もあり得るのかなと思います。ありがとうございます。

今のような御意見の出し方で十分結構ですので、何か御発言ある方、どんどん忌憚なく出していただければと思いますが、いかがでしょうか。

田代委員 よろしいでしょうか。

生島議長 田代委員、お願いします。

田代委員 今の御意見はすごく参考にというか、分かりやすかったんですけど、やっぱり事務局にどんな答申が欲しいと。事務局が言われちゃうと、ちょっとそこは、えっ、みたいになるので、その辺は皆さんの好きにしてくださいと返すのが普通ですよ。だから、そこはあまり擦り合わせしちゃうと、要は答申自体が、本当に役所風の、ちゃんと重箱に収まるみたいな話になっちゃうから、あまりそれはしないで、やっぱりみんなで好き勝手に言って、ちょっとずれてたってこれでいこうよみたいな話にしたほうがいいのかないかなみたいには思います。

それから、ライフステージという考え方は昭和の考え方なんでしょうけど、やっぱり何かそういうことを考えないと、みんな発散しちゃいますよね。だからどこで折り合いをつけるかということだと思いますね。うちは子供2人いるんですけど、長男のほうは本当にお嫁さんと子育て、3人いて子育てしてるんですけど、仕事は半分以下で、今、ゼロ歳から5歳までいるんですけども、忙しくて忙しくて、やっぱり女の人だけに押し付けられないんで、仕事半分の家庭半分くらいにしてるんですけど、娘のほうは、ちょっと上昇志向の強い亭主で、なかなか家庭のことをしないで、ワンオペみたいな感じで今まで来たんですけど、ここへ来て少し改心したのかどうか、ちょっと家庭のこと手伝ってますけど、そういう状況なので、一人一人全部違いますので、世代に押し込めるのは合わないのかもしれないんですけど、やっぱりそこを、何かじゃあ別のやり方があるのかなみたいなのは考えないと思うがないですよ。以上です。

生島議長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

あと、ちょっと触れておきますと、調査ということが2番目にあって、この調査ということについても、大分皆さん方のイメージしているものが異なるというのも思いましたし、一方で、これまで、私は2期、この前にやってきましたけれども、あまり出なかった発想に、例えば市民を対象にした調査であるとか、悉皆調査であるとか、やっぱり市民の暮らし、実体と学習の状況というのにも合わせる調査、こういうような量的な調査のアイデアというのが今回出てきているところも、ちょっと今までと違うなということで、でも十分に考えられることかなと思いました。

もう一つは、調査そのものをどう捉えるかというような、その前提に来るものですが、これまでもどういう調査をしてきたかというようなことはありましたが、実は少しプロセスをお話ししますと、今みたいに、やっぱりそれぞれの団体が背景にあったりとか、経験が違っていたりするということもあって、私たち、前期、前々期もやってきたときには、国立市の、具体的に言うと、施設でどんなことが行われているかについて現場の方から生で話を聞くというようなヒアリング調査。これは要するに実態を把握する。そしてその実態をみんなで共有するという機会になっていたかと思います。そうすると大分、委員の中で、あのときこの人はああいうふうに話していたよねと、目線が共通のものになってきた上で、こういうふうに解釈できるんじゃないかとか、こんな展開が考えられるんじゃないか。1つはそういうような機会になっていたかなと思います。

なので、調査と言っても、本当に量的に分析していくというようなこともあ

ろうかと思いますが、実態を把握していくというようなこともあろうかと思いますがし、または質的に、具体的に学びを深めていっている人たちをもっと深掘りしていく、そういうようなこともあろうかと思いますが。また、その手法につきましても、どういうふうに声を持っている人を捉えていくかというようなアイデアというのでも幾つか出されていましてけれども、そういうような視点も大切にしながら、どういう決着点にしていくかによって、これがあろうかと思いますが。いずれにしても量的なもの、質的なもの、または実態を把握するであるとか、共通する土台をつくっていく、または国立市でやっているものを1つまず、既存のデータを分析していく、そんな視点というのでもいただいたかなと思っておりました。

調査につきまして、何か皆さん方からほかにも御意見ありましたら伺えればと思いますけれども、する、しないということもそうですし、どの段階ですかということもそうですし、どういう対象、またはどういう目的で行っていくか。これ自体もまだまだこれからの議論かなと思いましたが、既にいろいろお話しいただいたところで皆さんでも少し共有できればと思っていたところです。いかがでしょうか。今まで出てない発想であるとか、例えば先ほど大森副議長からも、非常に、こういったところに切り込んでいかなければいけないんじゃないか、こういう問題というのに国立の社会教育、生涯学習としても、重い声というのをどうやって受け止めていくことができるかというようなところに切り込めるような視点というのは必要なんじゃないかというようなお話もありましたけれども、少しそういうようなウイングも持ちつつ、実体把握なり調査なりというのを検討していくということになろうかなというふうに思いました。

いかがでしょう。何か御意見ありましたら。

田代委員 今の段階で調査をどうするかというのは、多分無理だと思うんですね。

生島議長 そうですね。

田代委員 やっぱり議論していく中で、必要なものであるということがみんな分かってきたらやるので、そうしないと、何を質問していいとか、誰を対象とするかというのは全然分からないので、今はちょっとそれは、議論する必要はないのかなみたいに思います。

生島議長 ありがとうございます。そういうことでいいかなというふうに思いますが……。ほかに何か、付け加えておきたい点などがあれば、ここで御意見を御発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。今日はまず、皆さん方からのこの資料を基にしながら、しっかりと感触を聞くというところだったわけですが、お互いに何か、もう少しここを聞きたいというようなところがありましたら、少しここで聞きたいと思いますが、いかがでしょうか。

大森委員 1つだけよろしいですか。

生島議長 大森委員、お願いいたします。

大森委員 皆様の御報告が大変参考になったんですけども、その後の議論も大変参考になりました。特に堀委員から、今の流動化した社会でライフステージ論をしっかりと立てて聞くことができるのかどうかという問題提起がございましたし、

それから田代委員からは、そうはいってもある程度は押さえないといけないというところがあったと思うんですけど、大変重要なやり取りで、これは入り口としては、まず学習機会の充実というのを、形式的なものではなくて、実質的なものとしてしっかりつかんでいくと。そうした中でライフステージ論が成立するのかもしれないかも含めて整理をしていくという順番がよいのかなという印象を持ちました。

生島議長 ありがとうございます。議論の展開、順番ということを考えて建設的に御提案いただいたというところで、ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。

田代委員 すみません。

生島議長 田代委員、お願いいたします。

田代委員 今までいろいろお話を伺っていて、やっぱりどうしても分からないのが、生涯学習って何なんだということで、それが分からないと、いろいろ言われても理解できないということがあるので、そこをどなたかレクチャーしてもらえればいいんですけど。やっぱり寺澤委員がおっしゃったように、日々の勉強みたいなのも、お子さんができた女の人いろいろ困って、いろいろなところで調べてみるとか、そういうのも生涯学習だということであれば、それは継続しずっと人生の中でいろいろ勉強しているということになるし、あるいは講座を受けたりセミナーに行ったりというのが学習だという話なら、それはそれで、そういう場をどうやってつくっていくかという議論になりますから、その辺が分からないと、なかなか、今後話はできないかなみたいに思うんですけども。

生島議長 ありがとうございます。何か今の御意見につきまして、重ねてであるとか、こういうふうにもしろ展開していったらどうかというような御提案とかでもよろしいかなと思いますけれども、おありの方、いらっしゃいますか。

大森委員 いいですか。

生島議長 大森委員お願いいたします。

大森委員 今の田代委員の御意見に関しては、大体2つくらいやり方があるのかなという印象があるんですね。1つはオーソドックスなやり方で、やっぱりこれ、生涯学習、大事な概念ですから、ある程度、体系的に誰かを頼って整理をしてもらうというのはオーソドックスな行き方だと思うんです。ただもう一つ、一言で生涯学習、生涯教育と言っても、提示されてから半世紀以上、経っていますので、もう論者によって、重なりはあるけれども、かなりの違いもあって、かなりハードな作業にはなるだろうという気がするんですね。それ考えたときに、今回の諮問の文言を見たときには、ライフステージと学習機会の充実なんですね。諮問自体には生涯学習の文言はないので、まずは学習機会の充実というところに集中して、具体論をつかんで、ある程度目鼻が立ってから生涯学習という言葉と格闘したほうがいいのか。2つくらいあるかなと思います。

生島議長 ありがとうございます。大森副議長がきれいに整理を、御提案いただいたというところもあります。どの段階でというところというのもあるかと思いますが、私も今、御意見いただいたところは非常に思うところ、

共感できるところでもあって、何か、今これだけメンバーの中で、生涯学習を私はこうやって捉えていくであるとか、またはその中で、社会教育的な、こういうふうに活動していつているんだというようなことを考えますと、型にはまっているとか、外発的に言われているものにはめていくというよりは、むしろ自分たちで、こういうふうに捉えていった上で、この部分をこういうふうに展開していくというふうにしていくという、今の御意見だと2点目の話ですけど、そういう議論を展開していくことも十分できるんじゃないかなと、今、伺っていて思っていたところではあります。この辺りも今後少し詰めていきたいところではありますけれども、皆さんでやっぱりまず擦り合わせていくときに、レクチャーを受けるというよりは、どういうものを射程にしていこうかということとを共有していったほうがいいのではないかなと思っています。ちょっとまたそれは今後整理をしていこうと思いますが、提起として非常に大事なものとして受け止めていきたいと思っています。ありがとうございます。

大体、皆さん方からの御意見なども出てきたかなと思っているんですけども、次回に向けまして、私のほうのというか、私と事務局で、今日の皆さん方の話を少し整理をして、ポイントをまとめておきたいと思っています。それを参考にしながら、今後また、どういうふうに展開していくのか、どんな手順で議論をしていくか、その辺りを改めて確認していく作業にしていきたいと思っていますので、今までの議論を十分に参考にしながら、ちょっとそんな設計をしてみたいと思います。

よろしいでしょうか。何か言い残したこととかという方がありましたら、ここで発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

では、ここまでにしたいと思います。ありがとうございました。

そうしましたら、次第3に移りたいと思います。事務局からの連絡事項です。事務局からお願いします。

事務局 では事務局からです。まず、都市社連協についてお話しをさせていただきたいと思います。本日お配りしました資料2、都市社連協関連資料を御覧ください。

こちらですが、1ページ目からまず説明させていただきます。1ページ目に書いてあるものは、東京都市町村社会教育連絡協議会ブロック研修、研修会の案内となっております。こちらでブロックが、私たちは2番目のブロックになります。こちら、国分寺市が今年度は幹事となっております。開催日時が11月29日、土曜日、1時半から4時ということで、今のところこちらで調整中ということです。場所が国分寺市ひかりプラザというところです。研修テーマは「人と人がつながり学びが循環するまち～「広がる」・「超える」・「届く」～」。内容は、まだ予定ですが、テーマに沿った事例紹介、グループ討議となっております。こちら、ブロック研修会の御案内になっております。以上でございます。

続きまして、2枚目にまいりまして、こちらは交流大会ということです。こちらの実施要項となっております。日時が令和7年12月13日、土曜日、午後1時からとなっております。場所は小金井の宮地楽器ホール大ホールとなっております。内容については御覧のとおりとなっております。

続きまして3枚目となりまして、こちらは関東甲信越静岡の社会教育研究大会、今年度は神奈川大会となっております。日時が令和7年11月20日、木曜日と、21日、金曜日です。場所が関内ホールとなっております。こちらは2日間となっておりますので、1日目と2日目の内容が細かく、この中身、詳細が書かれております。こちらの関東甲信越静岡ですが、最後のページです。大会に参加される場合は、お申込みの方法がこちらに書かれておりますので、もし御

興味のある方は事務局までお声がけいただければと思います。先ほどの１ページ目のブロック研修会と、２枚目の交流大会については、お近くのブロック、研修会ですとか、小金井のホールになりますので、もし皆さん、御都合がつく方はぜひ参加のほう、よろしくお願いいたします。

都市社連協の関連資料の説明は以上となります。

事務局 すみません、今の件、少し補足させていただきます。１枚目と２枚目のブロック研修会と交流大会につきましては、また近づきましたら正式な通知が参りますので、また通知が来た段階で、通知を御案内させていただくとともに、皆さんの出欠の確認をさせていただきます。３枚目以降の関東甲信越静岡の研究大会につきましては、御案内は今回のみとなりまして、御関心がありましたら事務局まで御連絡いただければという趣旨でお伝えしたものでございます。以上でございます。

事務局 引き続き、次回の日程と場所の確認をさせていただきます。次回が第４回目の定例会となります。日にちが８月２０日、水曜日となります。午後７時からです。場所が今申し上げたとおり、こちらの第１・第２会議室で開催いたします。

連絡は以上となります。

生島議長 ありがとうございます。国立市の社会教育委員の皆さんの集まりですけれども、ブロックのつながりというのがあり、さらに都市社連協、全体のつながりがあります。そういう大小の中で、私たち自身も学ぶ機会であるとか、他市との交流する機会がありますので、ぜひ、まだ具体的な出欠はこれからですけれども、１１月２０日と、第２ブロックの場合は日程が決まっている、それから交流会につきましては１２月１３日となっておりますので、御予定つく方は、御予定いただいております。それから神奈川大会の場合は、これはいつまでというの。まだまだ先のことですけれども、恐らく、締切りが近づきましたら、締切りの御提示はありますね？

事務局 そうですね。こちらで確認はしておくのですが、詳細は１０ページでの東武トップツアーズさんでのお申込みとなるので、流れだけ今ちょっと御案内をさせていただきます。また次回等に、締切り等が分かりましたら御連絡させていただきます。

生島議長 ということのようです。ぜひよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

では、予定していた内容はこれまでもすけれども、皆さん方から何か、この委員の中で共有しておきたいとか御案内したいという方、いらっしゃいましたら御発言いただければと思いますが、何かありますでしょうか。よろしいですか。

ありがとうございます。それでは次回は８月２０日、水曜日の午後７時から、この会場となります。どうぞよろしくお願いいたします。これをもちまして本日の会議を終了いたします。皆さん、どうぞ暑いので、お体気をつけてお過ごしください。お疲れさまでした。

—— 了 ——